

第23章：エクスペリエンス（凜視点）

リーシャ in ヒロ：「どうして男のカラダがいいの？ずっと、ってこと？」

凜 in 麻美：「うん♥あたし…宙敬君のカラダにいるときに一番自分を素直に表現できて楽しい、って気づいたの。それに咲夜ちゃんと昨日、いっぱいおしゃべりして、楽しかったし…あたし、妹が欲しかったから…それに宙敬君のカラダも気持ち…良かったし…」

麻美 in リーシャ：「その気持ち、わかるわ。可愛いよね、咲夜ちゃん🥰」

凜 in 麻美：「あとは宙敬君があたしを受け入れてくれば…」



ヒロ in リーシャ：「凜がそこまで言うなら俺は別のカラダでもいいよ。」

凜 in 麻美：「ありがとう♥…宙敬君…嬉しい🥰」

リーシャ in ヒロ：「意外とあっさり受け入れたね…それよりそんなに気持ちいいの？ヒロのカラダ…ねえ…それなら凜にこのカラダをあげる前にあたしも経験してみたい😊」

凜 in 麻美：「うん！あたしがリーシャに男の子を経験させてあげる💋でもリーシャが宙敬君のカラダに定住しちゃわないよう自我はしっかり持ってね♥」

翌日、あたしはリーシャ in ヒロを麻美先生の部屋に招き入れた。

凜 in 麻美：「そこに座って、リーシャ。」

リーシャ in ヒロ：「うん…」

リーシャ in ヒロは椅子に座った。

凜 in 麻美：「緊張している？」

あたしはリーシャ in ヒロの足元にかがむと優しく微笑んだ。リーシャ in ヒロは心が落ち着き、お腹の奥の方がきゅんとなっている。そんなリーシャ in ヒロの心情を察したあたしは続けた。

凜 in 麻美：「男の子のカラダ不思議だよね。カラダの奥から衝動が湧き上がってきて🧐」

リーシャ in ヒロ：「凜も同じ感覚だったの？」

凜 in 麻美：「うん♥️今のリーシャと同じだよ。あたしは昨日、宙敬君のカラダの衝動が抑えられなくて、宙敬君に呼ばれて…そのときにあたしの心情に気づいてくれたの。」

第24章：エクスタシー（凜視点）

凜 in 麻美：「宙敬君みたいに上手くできないかもだけど、あたし頑張るね！」

リーシャ in ヒロ：「ありがと…凜はクールな麻美先生のカラダに入っても、凜だってわかるくらい優しい表情をしているね…ねえ、凜、今のあたしってどんな表情をしてる？」

凜 in 麻美：「透き通るような…誰もがそれを見ると心が洗われると思うよ。その笑顔はみんなを幸せにしてくれる♥️ちょっと緊張してるけど…リーシャは宙敬君のカラダに乗り移ってもリーシャだよ🧐」



リーシャ in ヒロの顔がリーシャの、屈託のない笑顔へと変わった。

リーシャ in ヒロ：「凜。こんなときに…だけど…なんか…凜の顔を見てお話ししていると、ココが熱いの🧐」

リーシャ in ヒロの股間はズボンを大きく押し上げている。ズボンはしっとりと湿っている。

凜 in 麻美：「恥ずかしがらないで、リーシャ。それが男の子のカラダなの。心があたしでも、リーシャでも、女の子の心だったとしても、愛おしく思ったら、ソコが熱く大きくなっちゃうものなの👉」

あたしは凜を包み込むように話し掛けた。

リーシャ in ヒロ：「そうなんだね、あたし…凜が、そんな表情の麻美先生が愛おしい💓」

凜 in 麻美：「ありがとう、リーシャ。あたしも大好き👉今その気持ちを解放してあげるからね👉」

あたしはリーシャ in ヒロのズボンのチャックをゆっくり開けた。中からそそり立つ大きなものが勢い良く飛び出した。顔を赤らめながらもあたしを見下ろすリーシャ in ヒロ。その切なそうな表情がとても愛おしい。リーシャ in ヒロのぴったり閉じていた膝が徐々に開いていく…

リーシャ in ヒロ：「ん…あ…💓」

凜 in 麻美：「我慢しなくていいんだよ、リーシャ。女の子なんだから、声を出して喘いで💓」

あたしはリーシャ in ヒロのおちん○んを取り出し優しく包み込んだ。



第25章：クライマックス（凜視点）

リーシャ in ヒロのカラダがぴくんと跳ねる。

リーシャ in ヒロ：「や、ああんっ♡凜…」

そしてリーシャ in ヒロのおちん○んをゆっくりと動かす。

凜 in 麻美：「かわいいね。リーシャのおちん○ん♡そしてものすごく遅い。」

リーシャ in ヒロ：「あたしの…おちん○ん？…んっ♡」

凜 in 麻美：「そう、リーシャのおちん○ん♡あたしが宙敬君に乗り移っているときよりも大きいよ。」

リーシャ in ヒロ：「あたし、そんなにエッチなの？♡」

凜 in 麻美：「そのカラダの気持ちいいところ全部知っているから…それにリーシャの、女の子の気持ちも良くわかる…そんなあたしが麻美先生のカラダに乗り移ってこんなことしたら誰だってそうなっちゃうわよ。」

あたしはリーシャ in ヒロのおしりの方に片手を伸ばし、アナルを愛撫しながらゆっくりと指を挿入する。リーシャ in ヒロの目が焦点を失い、だらしなく口を開き、全身を震わせている。



リーシャ in ヒロ：「あん…でもこのまま逝ったらあたしがヒロに定住しちゃうかも…」

リーシャ in ヒロは、あたしのカラダを抱き寄せると、濃厚な口づけを交わした。リーシャの唾液があたしの麻美先生のカラダに、あたしの唾液が宙敬君のカラダに入る。入れ替わ

るあたしたちのカラダ…カラダに広がる快感…あたしのものとなったおちん○んから脳に流れてくる「目の前の女性にこれを挿入したい」欲望を必死に抑え、あたしはリーシャが乗り移っているときよりも激しく喘ぎ、肉体を震わせ、果てた…

凜 in ヒロ：「やった！入れ替われた♥リーシャ、ありがとう♥逝く前にカラダを交換してくれて…」

リーシャ in 麻美：「気持ちよかった♥あのままだとあたしもヒロになりたいって願ってしまいかもだったから…」

??：（女も男の肉体に入れば、男と同じような気持ちになり行動をしてしまうのか…）

それを少し離れた上空から見ている者がいた。

第26章：リラクゼーション（凜視点）

あたしはリーシャ in 麻美にマッサージをされている。あたしの…この宙敬君のカラダは、さっきまでリーシャが乗り移っていて、あたしが極限までご奉仕したから疲れ切っている。そこで麻美先生のカラダに乗り換えたリーシャにこの肉体を癒してもらっている。リーシャ in 麻美はあたしのおしりを丁寧に揉みしだいてくれた。まだカラダに快感が残っていて、リーシャ in 麻美の手が触れるたびにあたしのカラダに快感の波が押し寄せてくる。

リーシャ in 麻美：「凜がヒロのカラダに乗り移ると一気に女の子っぽくなっちゃうよね、そのカラダ♥」



凜 in ヒロ：「え？どのあたりが💖？」

リーシャ in 麻美：「胸をクッションに押し当てて、おしりを突き出し、のけ反る姿勢…💖」

凜 in ヒロ：「だって、リーシャのタッチが気持ち良すぎるから…自然とあたしのカラダのときの仕草が出ちゃう……ねえ、リーシャ、あたしが宙敬君になっても大丈夫だよ？」

リーシャ in 麻美：「どういうこと？凜。」

凜 in ヒロ：「リーシャが宙敬君のこと、好きなのかなって…」

リーシャ in 麻美：「好きだよ。」

凜 in ヒロ：「じゃあ、やっぱりあたしは…」

リーシャ in 麻美：「凜も、宙敬君も友達として。凜はどうなの？」

凜 in ヒロ：「あたしは…わからない…でも気になっている…宙敬君のこと、もっと知りたいって思った…でも宙敬君のカラダになって自分に自信が持てたっていうのも確かだよ。」

リーシャ in 麻美：「あのね…凜がヒロと付き合いたっていうならあたしは凜を応援するよ。」

凜 in ヒロ：「ありがとう、リーシャ。まだそこまでの気持ちは正直ないけど、宙敬君と話してみるね。」

第27章：ダイアログ

ヒロ in リーシャ：「本当にいいんだな？凜？」

凜 in ヒロ：「うん。宙敬君のカラダ、あたしが大切に引き継ぐね。宙敬君は誰のカラダに定住したいの？」

ヒロ in リーシャ：「リーシャと麻美先生にも相談してみるよ。」

凜 in ヒロ：「うん…2人とも自分のカラダに戻りたいかもしれないから、そのときは…あたしのカラダ使って💖リーシャや麻美先生ほど魅力ないかもしれないけど…」

ヒロ in リーシャ：「そんなことないよ…凜は魅力的だよ！俺…最初に凜のカラダに入って、最初は正直女って面倒だと思った…」

凜 in ヒロ：「放課後教室に集まったとき、怖い顔してたよね（笑）」

ヒロ in リーシャ：「…長い髪も揺れる胸も邪魔だって思ってた…スカートも動きにくいし、振る舞いも女の子らしくしなければならない…」

凜 in ヒロ：「ずっと男の子として生きてきたんだから仕方ないよ！」

ヒロ in リーシャ：「ああ…でもその日帰宅して鏡で俺の、凜の顔を見たら凜が今まで見せたことのないような厳しい表情をしていたんだ…俺は思いつく最高の笑顔を作ってみた。そしたら鏡の中の凜はとても愛らしく幸福感に満ちた表情をしていた…」

凜 in ヒロ：「見てみたかったな…そのときのあたし…」

ヒロ in リーシャ：「元々可愛いんだし、思いやりもあって優しい。カラオケ誘っても来てくれなかったけど、最近は俺たちと一緒に楽しんでくれて嬉しいよ。」

凜 in ヒロ：「最近はみんなといるのが楽しい♥ 宙敬君は男の子と遊べなくなっちゃったね。」

ヒロ in リーシャ：「凜たちと過ごすのも悪くない。」



凜 in ヒロ：（え？リーシャの瞳の色が蒼く変わった？あ、茶色に戻った。何だったんだろう）

凜 in ヒロ：「…宙敬君はこれから女の子として生きるんだから、誰のカラダになるか後悔しないようによく考えてね。」

第28章：リターン（ヒロ視点）

俺はまずリーシャ in 麻美のところへ行った。

ヒロ in リーシャ：「麻美先生は俺たちと違って働いている…それに麻美先生になるってことは俺たちの高校生活を終わらせるってことだ…」

リーシャ in 麻美：「あたしたちには荷が重いわね…」

ヒロ in リーシャ：「そうだな。麻美先生には自分のカラダに戻ってもらおう。」

俺たちは麻美先生の元に行き、2人の意見を伝えた。麻美先生も同じように考えていて、自分のカラダに戻ることに納得していた。

麻美：「これはこれでいいんだけど…たまに入れ替わってあたしを満足させてくれる男の子はいないかしら？♥♥」



凜になっていた麻美先生と麻美先生になっていたリーシャはお互いのカラダを慰め合い、カラダを交換して麻美先生は自分のカラダに戻り、リーシャは凜のカラダへと移った。

リーシャ in 凜：「これで残るはあたしたちがどうするかになったね。ヒロはどうしたい？」

ヒロ in リーシャ：「俺はあの海のと看からずっとリーシャのカラダでいたいって思っている。」

リーシャ in 凜：「ヒロがものすごく怒って麻美先生に腹パンされちゃったときから？」

恥ずかしそうに頷くヒロ in リーシャ。

リーシャ in 凜：「あのね…聞いて…ヒロはね、海であたしになっているとき、催眠術を掛けられていたの。ヒロがあたしだと思込むように…そのときあたし、ヒロを取り戻そうと逝かせちゃったの…」

ヒロ in リーシャ：「あのとき意識が朦朧としてあまり覚えていなかったけど…ってことはあのときから俺はリーシャのカラダに定住してしまったのか…」

リーシャ in 凜：「ゴメン…言い出せなかった…まさかヒロがあたしのカラダを気に入っているなんて思っていなかったから…」

俺はリーシャ in 凜を愛おしく思い、頭を撫でた。

第 29 章：ブルーアイズ（リーシャ視点）

ヒロ in リーシャ：「俺の方こそリーシャの大切なカラダを奪ってしまって悪かった…」

リーシャ in 凜：「あたしは凜のカラダ、気に入ってるからこのままでも大丈夫だよ。」

ヒロ in リーシャ：「ありがとう…でも俺、不安なんだ…リーシャとして生活できるか…」

ヒロ in リーシャは今にも泣きだしそうな表情をしている。そんなヒロ in リーシャをあたしは優しく抱きしめる。



リーシャ in 凜：「大丈夫だよ。ちゃんとあたしがフォローしてあげるから。女の子の楽しさを知ったら男の子の未練なんてなくなると思うけど覚悟してね（笑）。まずは…」

あたしはヒロ in リーシャの胸を掴むと、緩急をつけて揉み始めた。不意を突かれたヒロの口から声が漏れる。

ヒロ in リーシャ：「う…ううう…」

リーシャ in 凜：「今度はヒロの意識のまま逝かせてあげるね♥」

身をよじらせて抵抗していたヒロ in リーシャだったが、ほどなく自分からあたしに身を寄せてきた！その表情は女そのものだった。あたしはヒロ in リーシャを抱き寄せ、背中からおしりに沿って優しく指を這わせる。

リーシャ in 凜：「どう？ヒロ、あたしのカラダ…」

ヒロ in リーシャ：「ああ…いい…」

リーシャ in 凜：「元のカラダとどっちがいい？」

ヒロ in リーシャ：「リーシャのカラダ♡」

リーシャ in 凜：「どこが気持ちいいの？」

ヒロ in リーシャ：「全部♡」

リーシャ in 凜：「どこを触って欲しい？」

ヒロ in リーシャ：「おま〇こ♡」

あたしは妖艶な表情を浮かべてそこを攻めた。あたしの指をそこに出し入れするたびにヒロ in リーシャは激しく喘ぎ、全身を小刻みに震わせている。そしてあたしの指をきゅーっと締め付けると、びくんと跳ねあがり失神した。再び目を開いたヒロ in リーシャの瞳は蒼く輝いていた。

最終章：デパーチャー

凜はヒロになって開放的になった。優しく思いやりのある性格はヒロの肉体になっても変わることなく、その想いを勇氣ある行動として自分のしたいことを実践していった。今では多くの女子の憧れとなっている。妹の咲夜ともショッピングに出かけたり、毎日のようにガールズトークを楽しんでいる。

麻美は元のカラダに戻って、彼氏ができ幸せな生活を送っていた。心身共に男を知り尽くした麻美は彼を虜にしていった。近々結婚するそうだ。



そしてあたし、リーシャとヒロは…

ヒロ in リーシャ：「リーシャ、今日はなんか元気ないな、何かあったか？」

ヒロはあたしの手優しく触れ、顔を見つめる。学校が終わると、こうしてどちらかの部屋で二人で過ごすことが多くなった。ヒロはあたしとなったが、中身はヒロのままだ。

リーシャ in 凜：「ううん…あのね…」

あたしは否定しつつも言葉を続けてしまう。

ヒロ in リーシャ：「そうか、それは大変だったな…リーシャ、今気づいたんだが、そのブレザー、リーシャらしさが出ていて可愛いと思うよ。」

リーシャ in 凜：「ありがとう、ヒロ。」

あたしの心のモヤモヤが晴れていく。

ヒロ in リーシャ：「リーシャは真面目だからな、俺のようにもう少し気楽に過ごすとなんดารうけどな。」

ヒロが「俺」というのはあたしと二人でいるときだけだ。あれからヒロは日増しに女性らしくなっていった。言葉遣いや仕草などは女性以上に洗練されていると感じることもある。きっと毎日努力してくれたんだね。

不意にヒロはあたしをベッドに押し倒すと、服を脱がせていく。ヒロの指があたしの肌に触れる。

ヒロ in リーシャ：「いつものやるか。」

リーシャ in 凜：「うん！」

ヒロはあたしの疲れたカラダをこうして癒してくれる。女の子のカラダで疲れやすい僧帽筋や肩甲骨、おしりの上、太ももなど…自らも女の子として張りを実感しているので、的確にツボを刺激してほぐしてくれる。あたしは身も心も開放的になり愛されていると感じる…あたしもヒロを愛撫してあげる。元のあたしのカラダだ。どこをどうして欲しいか良く知っている。

リーシャ in 凜：「ヒロ…ずっとあたしのカラダにいてね…」

ヒロ in リーシャ：「ああ…ん…うん♡」

ヒロが可愛らしく喘ぐ姿を見せるのはあたしといるときだけだ。

リーシャ in 凜：（今の生活は満足している♡でも…あたしはいつかきつ男のカラダを手に入れあなたと一緒に…そのときは今よりもっと激しい快感を与えてあげるからね♡）



Appendix

??：（やはりリーシャがヒロを逝かせたとき、ヒロは既にリーシャのカラダに定着していたのか。ヒロはその後それまで通りヒロらしく生活していた…しかし最後にリーシャに逝かされた後、ヒロの雰囲気は変わっていた。ヒロが定住したのは本当にあのときだったのか?…!もしかしたら入れ替わりフィールドの発動条件が甘かったか…。うーむ、課題が見つかっただけでも今回の実験は成功とするか)

そう呟くと、それは街のはるか上空で消えてしまった。